

ネイチャー高知

日本のカメー斉調査に参加しましょう

日本自然保護協会の2023年の自然しらべはカメです。

日本のカメー斉調査は2003年、2013年、2023年と10年ごとに行われていますので、前回調査に参加された方もおられると思います。もし、手元に前回調査の記録がありましたら、それを基に10年の変化を追ってみるのも、有意義な結果が得られると思います。

【参加方法】

今回の調査は、生きものコレクションアプリ「Biome（バイオーム）」を使って行われますので、スマートフォンにアプリをインストールすることが必要です。

- ① 生きものコレクションアプリ Biome(バイオーム)をスマートフォンにインストールする。
- ② トップ画面から「日本のカメー斉調査」を探して、タップする。

※Biomeにはたくさんの調査が登録されています。その中から「日本のカメー斉調査」を探しだし、タップしてください。

- ③ 画面右下のボタンをタップすると、カメラが起動し、撮影した画像を投稿できます。

詳しくは、自然しらべ2023のHP

(<https://www.nacsj.or.jp/shirabe/2023/06/36221/>) をご覧ください。

写真は高知県で見られる淡水生のカメ（NACS-J 日本のカメー斉調査パンフレットから）
ニホンイシガメ クサガメ ニホンスッポン ミシシippアカミミガメ



数年前から保護活動が続けている休耕田の周囲では、貴重な里山の植物たちが良い状態で生育している。牧野さんが確認して以来約 130 年ぶりに再発見されたホザキノミミカキグサや村を代表するヒメノボタンも、もうこの場所だけにしか残ってはいないが、毎年美しい花を咲かせてくれる。耕作を続けていた頃の田んぼは、稲刈りのあと無数の小さな水田雑草が出てきて賑やかだった。ミミカキグサやマルバノサウトウガラシ、スズメハコベ、ホシクサの仲間たち等々。休耕田になって2年目頃には、これまで見たことのなかった植物が突然姿を現した。アオコウガイゼキショウだ。斜面や畦にしか生えていなかったハリコウガイゼキショウやミズトンボも、次第に田んぼの中にまで生えるようになった。同時にタチスズメノヒエやメリケンカルカヤ、セイタカアワダチソウなどの大型の外来植物も侵入を始め、少しずつ遷移が進行してきた。一方で、初めて出現したと喜んだのも束の間、アオコウガイゼキショウが次第に数を減らしてきた。この植物は耕作中には全く確認されておらず、また長く管理放棄された水田跡でも見たことがない。休耕直後のある一定期間のみ姿を現し、適度な攪乱によって生育が維持されるのではないかと考えた。そこで、今年はこれまで畦と斜面の草刈りだけにとどめていたものを、田んぼの中にまで広げ、野焼きとその後の耕起までを行うことにした。

2月。うっすらと雪化粧した枯草を刈り、草が乾くのを待って1週間後に野焼きをした。4月になるとヤマドリゼンマイが孢子葉を出し、斜面を美しく彩っていた。田んぼの中にも柔らかい新芽が出て、緑のカーペットを敷いたようであった。保護活動のメンバーで唯一の農家の若者が、耕運機で田んぼを耕してくれた。大雨のあと土砂が流入し水路がせき止められたままになっている。改修できれば米作りもできるのだが、村に相談しても対応は難



しいという。今はこのような形での保護活動をするのが、わたしたちにできる精いっぱいのみやりかただ。地権者が元気で米を作っていた頃の、里山の手入れについてもきいてみた。水田の周囲を広範囲に草刈りし、野焼きも行っていったそうだ。その頃には、今よりもっと多くの植物や生き物がいたにちがいない。

私が子供だった頃、日々の暮らしはいつも自然と共にあった。母は毎朝まだ子供たちが眠っている早朝に田んぼの草刈りに出かけ、家畜にまず餌をやる。そのあと家族の朝食の準備をした。牛や馬は農家にとってとても大事な働き手だった。道端の斜面には小さな石が置かれ、「柴神様」が祀られた。この前を歩くときは、傍らに生えるヒサカキの枝などを折り供えた。柴神様は旅の安全や悪霊が侵入するのを防ぐ神様だが、田のそばにも無造作に木の枝をそっと置いて祈る場所があったように思う。葉は落ちて肥料となり、豊かな実りをもたらす。農作業で使う鎌や鍬をきれいに洗ってむしろの上に並べ、道具に感謝する「かなむこさん」という日もあった。お盆や七夕、夏祭りなどにはサルトリイバラの葉にくるんだ柴餅がつくられた。豊作に感謝し祖先を供養する、そこにも里山の植物を欠かすことはなかった。今、我が家の田んぼも米を作らなくなって、自然遷移が進んでいる。秋になってミズトンボが白い花を咲かせることが唯一の慰めだ。家族と隣近所総出の「結（ゆい）地元では イイ」といった」という助け合いの仕組みでいてくれるおばさんたちに混じって、田植えをした頃が懐かしい。田んぼとその周辺には、生き物だけでなく、つながりあえる温かいところがあった。わたしたちの暮らしをそっと見守ってくれる、小さくて心優しい神様たちもたくさんいらっしゃる。なくしてはならない大切な風景である。

今年はこの活動に、たくさんの方たちが資金面で応援をしてくださった。いつまで継続できるか不安があったが、勇気をだしてお願いをしたら、力を貸してくださる方がいることがわかり、元気がでた。



休耕田の溝に生えるヤマトミクリ

ご協力くださった皆さん
ありがとうございました。

高知の植物化石(3) 牧野博士と植物化石

三本 健二

インターネットで公開されている日本古生物標本横断データベース jPaleoDB で「Makino」を検索したところ、多くの化石標本がヒットした。ほとんどは栃木県那須塩原市で採集された約 30 万年前の化石である。これくらいの新期の地層であれば、出てくる植物化石はほとんど現生種なので、学名の命名者として Makino は多い。中にはヨコグラノキ（葉化石）もある。

それらに混じって、佐川で採集された化石もいくつかヒットした。さらに「牧野」でも検索したところ、佐川で採集された化石数点が東北大学に所蔵されていることが分かった。

その中に、佐川町のジュラ紀石灰岩から採集された巻貝化石があった。その化石は、私が 40 年以上前にコピーして手元に置いていた論文で扱われた化石と標本番号が一致した。牧野博士が採集した化石 1 点と博士が寄贈した化石 1 点が、2 種の巻貝化石のタイプ標本（シンタイプ）に含まれていることが分かった。このことについては、横倉山自然の森博物館発行の『不思議の森から』 vol. 47（2023 年 3 月発行）で紹介してある。

さて、牧野博士は著書の中で佐川の貝化石、ウニ化石、植物化石について書いているが、ここでは植物化石に限って紹介する。

1955 年に刊行された上村登著『牧野富太郎伝』では、1939（昭和 14）年の帰郷の時、佐川を歩きながら上村氏に語った介石山（佐川町）の白亜紀化石の話の中に次の属名が出ている。

シダ： *Cladophlebis*, *Onychiopsis*, *Sphenopteris*

広義のソテツ類： *Zamiophyllum*

介石山からこれらの属の植物化石を報告したのは横山又次郎の 1894（明治 27）年の論文である。牧野博士はそれを読んだと思える。

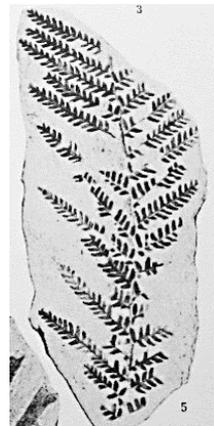
ところが、亡くなった翌年の 1958 年に刊行された『我が思ひ出（遺稿）』では、介石山とほぼ同じ地質時代の領石（南国市）の植物化石について書いた短文中には *Pecopteris* しか出ていない。私はこれに注目した。

Pecopteris は、上記の横山論文でも、ナウマンが採集した化石を扱ったナトルストの 1890（明治 23）年の論文でも使用されている。しかし、1922（大正 11）年の矢部長克（ひさかつ）の論文では、ナトルストと横山が *Pecopteris* に入れた種を *Cladophlebis* に移している。

このことから、『我が思ひ出（遺稿）』に出てくる *Pecopteris* は、1939年の帰郷の時に上村氏に語ったことよりもずっと古い論文の記憶を反映しているのではないかと思う。



Pecopteris cf. browniana



Pecopteris geyleyriana

↓
Yabe (1922)では
Cladophlebis geyleyriana

→ Yabe (1922)では
Cladophlebis browniana

Nathorst(1890)が図示した *Pecopteris* 2種 スケールバーの長さは5cm

引用文献

上村 登. 1955. 牧野富太郎伝. 六月社, 大阪.

牧野富太郎. 1958. 我が思ひ出（遺稿）. 北隆館, 東京.

Nathorst A. G. 1890. Beiträge zur mesozoischen flora Japans. Denkschriften der mathematisch-naturwissenschaftlichen Classe der kaiserlichen Akademie der Wissenschaften, Wien, 47: 4-6, pl. 1-6.

Yabe, H. 1922. Notes on some Mesozoic plants from Japan, Korea and China, in the collection of the Institute of Geology and Paleontology of the Tohoku Imperial University. I. Science reports of the Tohoku Imperial University, 2nd series, Geology, 7(1): 1-28, pl. 1-4.

Yokoyama, M. 1894. Mesozoic plants from Kozuke, Kii, Awa and Tosa. Journal of the College of Science, Tokyo Imperial University, 7(3): 201-231, pl. 20-28.

牧野富太郎命名植物 その2

坂本 彰

第2回は身近に生えていて、日ごろ目にする機会の多い種を選んでみました。



ナガバナタチツボスミレ



ノジスミレ



シハイボスミレ



キシツツジ



コバナタツナミ



ヤブイバラ



シュンジュギク



ハマダイコン



コモチマンネングサ



ラセンソウ



ヤマジノホトトギス



ハマアザミ

【写真掲載種】

- ナガバノタチツボスミレ *Viola obtusa* Makino (スミレ科)
- ノジスミレ *Viola yedoensis* Makino var. *yedoensis* (スミレ科)
- シハイスミレ *Viola violacea* Makino var. *violacea* (スミレ科)
- キシツツジ *Rhododendron ripense* Makino (ツツジ科)
- コバノタツナミ *Scutellaria indica* L. var. *parvifolia* (Makino) Makino (シソ科)
- ヤブイバラ *Rosa onoei* Makino var. *onoei* (バラ科)
- シュンジュギク *Aster savatieri* Makino var. *pygmaeus* Makino (キク科)
- ハマダイコン *Raphanus sativus* L. var. *hortensis* Backer f. *raphanistroides* Makino (アブラナ科)
- コモチマンネングサ *Sedum bulbiferum* Makino (ベンケイソウ科)
- ラセンソウ *Triumfetta japonica* Makino (アオイ科)
- ヤマジノホトトギス *Tricyrtis affinis* Makino (ユリ科)
- ハマアザミ *Cirsium maritimum* Makino (キク科)

引用

米倉浩司・梶田忠 (2007ー) 「植物和名ー学名インデックス YList」(YList), <http://ylist.info> (2023年7月25日閲覧)

気ままなカメラ日記

久川 信子

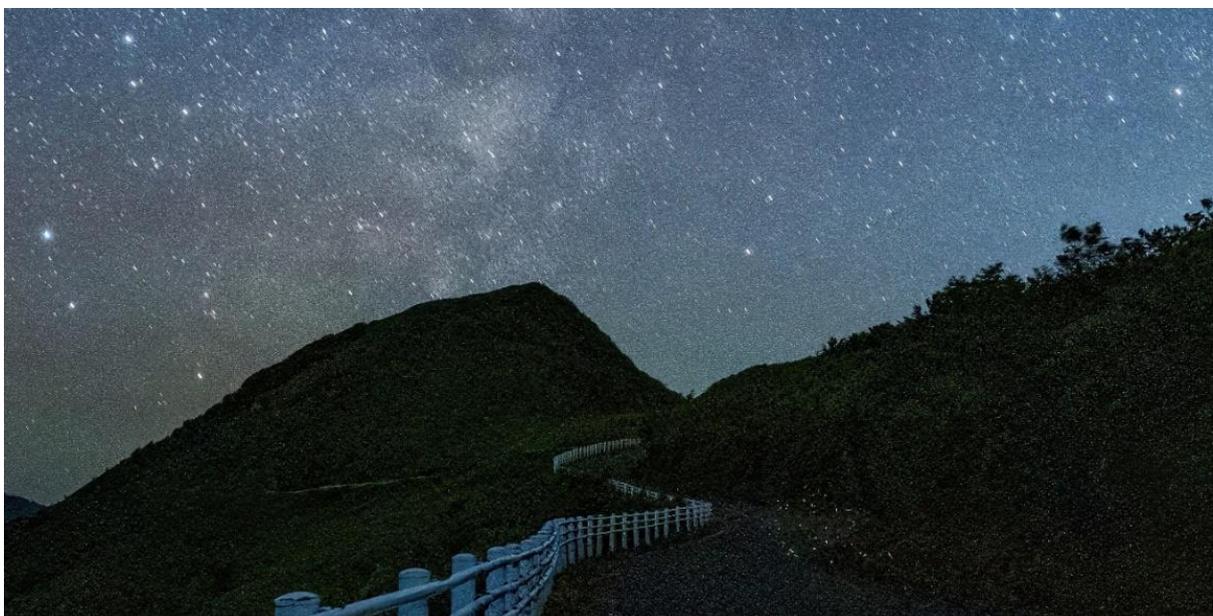


6月9日 大型の昆虫『ヘビトンボ』！実物を見たのは初めて。幼虫期に綺麗な水でないと棲めないため水質の指標生物の一つだそうです。のいち動物公園の敷地内で来園者の方が初めの1頭目を見つけたのですが、その後2日間で3頭確認しました。今年も身近な三宝山の多様な環境に感心しきりです。



7月4日 4月頭からその場所の主となっているオオルリがいました。野鳥を探しているといつも現れますが、この日は目の前で水浴びをし、ドヤ顔でしばらく羽干し…オオルリの羽干し!?私的にイメージしてなかった光景です。暑い夏の鳥見にオオルリ君からのサプライズです。

7月20日 今季、野鳥の会&指導員のT氏から、シカの食害にまつわる野鳥についてご教授いただきました。休日ふとその話を思い出し、笹が多い石鎚山系に行けば野鳥が多いのでは？と夜中に車を走らせました。まだギリギリ星が撮影できる時間に UFO ラインに到着。欲張って星も撮影していると、前方から光が向かってきました…正体は、午前3時過ぎにヒメボタルでした。カメラの点滅灯をメスと勘違いして、道路の地表をやって来たようです。ホタルたちはすぐに茂みに消えていきました。わかります？本当に小さな点々でごめんなさい。そして肝心の野鳥はというと、夜明け前から大合唱です！コマドリもたくさん鳴いていました…が！茂みから出て来てくれませんか(^^)



朝倉城址城山の植物 その3 アゼオトギリ

坂本 彰

アゼオトギリはオトギリソウ科オトギリソウ属の多年生草本で、高知県ではレッドリスト2020で絶滅危惧ⅠB類(EN)にされている。環境省のRL2020でも絶滅危惧ⅠB類である。他のⅠB類と比べてみると、見かける機会は差がないが、消えるのは明らかに他のⅠB類より多いように思う。高知市春野町の農道の例では生育を確認した次の週に、開花を見計らって出かけて行ったが、すっかり刈り取られていた。頻繁に草刈りがされるような環境で生える植物である。



アゼオトギリの名前は、牧野植物図鑑にあるとおり田の畔に生えることからつけられたものであろう。畦に生える雑草は、生えては刈り取られ、生えては刈り取られるの繰り返しで、田起こしから稲の収穫まで続くなかで生活してきた。アゼオトギリもそのような頻繁に草刈りが行われる環境に適応して生存していると考えられる。畦をめぐる環境は、昔は鎌で一握りずつ刈り取っていたものが、草刈り機の出現によってすっかり様子が変わってきた。特に草刈り機にナイロン製の紐をつけて刈る方法は、植物の根元付近から薙ぎ払うために、ダメージが大きい。また、稲を収穫した後は、畦に除草剤を散布する農家も多く、多年生の植物は年が越せない状態になる。そんなことが重なって、かつては多様性が見本のような水田の畦も、単純な植生に変わったように感じる。アゼオトギリも畦以外の場所で見かけることが多い。

朝倉城址ではかつての詰め段に至る道が年に数回草刈りがされており、そんな場所でアゼオトギリを確認することができる。ただ、アゼオトギリは管理放棄で草ぼうぼうになっても消えず、頻繁な草刈りでは開花に至ることができない、なんとも扱いの難しい植物である。2020年、アゼオトギリの周りに目印のテープを張り、理由を書いたカードをつけて開花・結実まで草刈りを伸ばしてもらってアゼオトギリの調査をした。その年は多数の開花を確認できたが、毎年行うことはできず、次の年は元の状態に戻ってしまった。今年も細々と命を繋いでいる。



9月 - 11月の観察会のお知らせ

草原の植物観察会

観察会の主役はホソバヒメトラノオですが、この時期はイガクサ、コキンバイザサ、ヒキヨモギ、ヒメノハギなど草原生の植物を観察することができます。

日時 9月2日（土曜日）9時から12時

場所 高知市皿ヶ峰周辺（9時に筆山第2駐車場（皿ヶ峰入口）に集合）

講師 石川慎吾さん（高知大学名誉教授）

募集定員 20名

持ってくるもの メモ用具 あれば図鑑

その他 雨天中止です

10月以降の予定

10月9日（月曜日・スポーツの日）午前9時から12時 棚田の植物と秋の七草観察会

場所 高知市久礼野

講師 細川公子さん

10月22日（日曜日）10時から12時 アサギマダラ観察会

場所 香美市土佐山田町 龍河洞スカイライン周辺

講師 山崎三郎さん

11月23日（木曜日・勤労感謝の日）9時から12時 蛇紋岩地の植物観察会

場所 高知市蓮台

講師 細川公子さん

いずれの観察会も事前の申し込みが必要です。参加を希望される方は下記事務局まで連絡ください。

企画展 四万十の植物学者 さわらぎ先生の語り草

1988年2月の会発足以来、2009年2月まで会長として、その後は顧問として、ご指導いただいた澤良木庄一先生の足跡をたどり、先生の功績や植物を通して環境や社会を見つめた先生の視点を紹介する企画展「四万十の植物学者 さわらぎ先生の語り草」が四万十市で開催されています。

会場 四万十市中村 2356 為末公園内 四万十市郷土博物館

会期 2023年9月26日まで（開館時間は9時から午後5時） 水曜日は休館

入場料 大人440円（65歳以上の方は無料）

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

No. 61 2023年7月30日発行

事務局 780-8075

高知市朝倉南町3-51-1 坂本彰 方

TEL&FAX 088-850-0102

E-Mail s-akira@mvd.biglobe.ne.jp